

共同研究グループ活動報告（2023年度）

日中関係史

2023年度は、対面とオンライン会議を併用しながら研究会を開催した。研究会の記録はすべて<http://chineseovers.jugem.jp/>に掲載している。

以下、本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

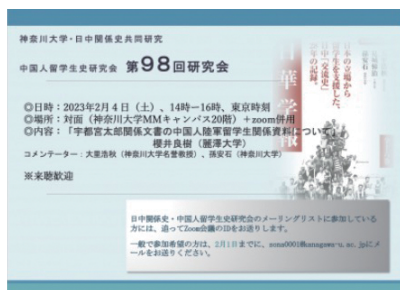
(1) 第98回研究会

◎日時：2023年2月4日（土）

◎場所：対面会議（MMキャンパス 20階 50032）+ zoom 併用

◎報告：「宇都宮太郎関係文書の中国人陸軍留学生関係資料について」櫻井良樹（麗澤大学）

コメンテーター：大里浩秋（神奈川大学名誉教授）、孫安石（神奈川大学）



(2) 第99回研究会

◎日時：2023年2月25日（土）

◎場所：対面会議（MMキャンパス 20階 50032）+ zoom 併用

◎内容：

- ・「『杏壇新史』 Wechat から見る中国の教育史研究の現段階」譚皓（天津大学教育学部、『杏壇新史』Wechat 公衆号運営メンバー）
- ・「清末東京高等師範学校卒業生の在華教育活動について」黄潔萍（中国・中山大学博士課程、神奈川大学外国語学研究所海外招聘研究員）

(3) 第100回研究会

◎日時：2023年4月1日（土）

◎場所：対面会議（MMキャンパス 20階 50032）+ zoom 併用

◎報告：若手研究者による研究テーマ交流会

- ・「同仁会の医療活動研究」王格格（中国・南京医科大学、医学史研究中心）
- ・「近代江西省における中国留日学生と医学校の創設」梁驍（千葉大学、D1）
- ・「清末における唱歌の受容と『音楽学』の出版」呂政慧（名古屋大学、D2）
- ・「1960年代の日・中教育学術交流」樊怡舟（広島大学、高等教育研究開発センター研究員）
- ・『清議報』と翻訳・掲載された日本語記事について」古谷創（明治大学、M1）
- ・「清国陸軍留学生の留日経験」張希（中国・中山大学歴史学系、D2）

(4) 第 101 回研究会

◎日時：2023 年 4 月 22 日（土）

◎場所：zoom 会議

◎報告：広島で被爆した中国人留学生について（西本雅実氏，中国新聞元記者）

司会：川崎真美

コメンテーター：周一川（日本大学，元教授）

(5) 第 102 回研究会

◎日時：2023 年 6 月 10 日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 11 階）+ zoom 併用

◎報告：法政速成科の中国人留学生と笈克彦（李曉東，鳥根県立大学）

一司会：見城悌治（千葉大学）

一コメンテーター：高田幸男（明治大学）孫安石（神奈川大学）

(6) 人文学研究所シンポジウム（第 103 回研究会）

◎日時：2023 年 9 月 16 日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 11 階 50032）+ zoom 併用

◎報告：「音楽分野の日中関係史を考える」

・「清末における唱歌の受容と『音楽学』の出版」呂政慧（名古屋大学，D2）

・「1910～1920 年代の北京の音楽界と中国人留学生」鄭曉麗（中国・浙江音楽学院，専任講師）

◎コメンテーター：尾高暁子（東京芸大，講師）



(7) 第 104 回研究会

◎日時：2023 年 12 月 9 日（土）

◎場所：対面会議（MM キャンパス 1 階・米田吉盛記念講堂）+ zoom 併用

◎報告：(1) 「関東大震災における中国人虐殺事件——国際労働力移動の観点から見る」川島真（東京大学教授）

(2) 関東大震災と中国人留学生」孫安石（神奈川大学教授）

(3) 「川島真氏，孫安石氏に対するコメントと報告」見城悌治（千葉大学教授）

（文責 Son ansuk（孫安石））

言語変異研究

1. 今年度の主な研究内容：

今年度は主に次の 4 つのテーマに関するデータ収集，整理，分析と執筆活動を行った。

①中国語の標準化・近代化に関する生態言語学的研究

- ②記号論の視点から見る美術の表現・表象と言語学の意味・含意とのかかわり
 - ③モダリティ・ポライトネスに関する日中異文化語用論の考察
 - ④中国における「国語」という概念の成立, その語彙的意味の変化および南北朝時代(439~589年)からの中国語と西北部の異民族言語との多言語接触の研究
2. 今年度の主な研究成果:
論文執筆「中国語の語彙近代化の生態言語学的考察——新語の群生と「適者生存」のメカニズム」『歴史言語学』(第12号)日本歴史言語学会(2024年12月刊行予定)。
 3. 今年度購入した主な研究所蔵資料:
『中華大蔵経 続編 19~31 漢傳注疏部(二)』(全12冊)
 4. 次年度以降の主な研究計画:
著書『日中異文化の語用論——モダリティ・ポライトネスの諸相』の執筆。

(文責 彭国躍)

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
 - 2022年度第3回研究会
(2022年度になるが, 昨年度の活動報告に組み入れられなかったので, ここに報告する)
開催日: 2023年3月23日
会場: オンライン&対面(みなとみらいキャンパス17017)
発表者(所属):

村井まや子(本学外国語学部 英語英文学科教授)

「Making a Multispecies Fairy Tale Library」

文学のふるさととも言うべき民話から始めて, 物語論そして民俗学の見地も導入しながら, 既存の人間中心主義的・男性中心主義的な分類を脱し, 現代のジェンダー論的, 多種共存的な見地に適合する形でのおとぎ話分類法へ導く議論であった。イソップ寓話など, 動物をたとえとして人間に教訓を与えるかのような寓話もまた, 動物そのものの物語として読みかえることも可能であり, 竜退治という物語が, 女性を犠牲者と受動性によって特徴づけたジェンダーバイアスによって, 特権的な位置を与えられてきた歴史も無視してはならないだろう。こうした問題点をふまえて提案された分類法について, とりわけ最後のカテゴリー「複数種の社会」を映し出す物語は, 主人公や登場人物(動物)どうしの関係に還元されがちなおとぎ話分析に, コミュニティという観点を導入するという点で鋭い指摘であった。

熊谷謙介(本学国際日本学部 国際文化交流学科 教授)

「倒錯 perversion か侵犯 subversion か? —— フランス世紀末女性作家ラシルドと動物愛」

フランス世紀転換期の女性作家による動物表象はコレット(『クロディーヌ』シリーズなど)に代表されるが, 男装も実践していた特異な作家であるラシルドによる『動物女』という作品に焦点があてられた。動物的本能のままに生き, 故郷を追われた女性主人公が, バリで雄猫と出会い, 愛し合い, 壮絶な最期を遂げるというこの作品が, 女性=動物というステレオタイプや動物性愛, ケアといった観点から読み直された。女性と猫の間に, 人間・男性を排除した理想の恋愛関係が打ち立てられ, 倒錯 per-

version や病理と解釈される余地を残しつつも、既成の性秩序の侵犯 subversion, さらには女性の解放の契機を示唆する物語という解釈が提示された。他方、相互にケアしあう両者の関係に潜む暴力もまた無視できないという論旨であった。

- 2023 年度第 1 回研究会

開催日：2024 年 3 月（予定）

会場：オンライン&対面（みなとみらいキャンパス 17017）

『動物×ジェンダー——マルチスピーシーズ物語の森へ』書評会

2024 年 2 月に発行予定の本研究グループ叢書『動物×ジェンダー——マルチスピーシーズ物語の森へ』（村井まや子・熊谷謙介編著、青弓社）の発刊を記念して、執筆者から発言をいただくとともに、全体の枠組みや今後の展開もふまえて議論をする予定である。

2. シンポジウム

なし

3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析』を 2020 年 2 月に出版したが、その後に続く企画として、2020 年度から「動物」や「種」とジェンダーの関わりをテーマにした叢書の出版を目指して、学内・学外から多くの新メンバーを集め研究会を組織している。

2023 年 3 月 23 日に行われた 2022 年度第 3 回研究会では、村井まや子、熊谷謙介による発表が行われ（内容については上記参照）、この二つの発表を手掛かりとしつつ、2023 年度に本研究会から動物・種とジェンダーの関係をめぐる叢書を作るという方針が正式に立てられた。

2023 年度に入り、叢書出版に向けて出版社との調整、各論、また序論の執筆に尽力した。2024 年 1 月現在、最終校正を行っており、2024 年 2 月に青弓社から「神奈川大学人文学研究叢書第 50 巻」として発行予定である。以下に内容・目次を掲載する。

神奈川大学人文学研究叢書 50

『動物×ジェンダー——マルチスピーシーズ物語の森へ』

村井まや子（編著）／熊谷謙介（編著）

A5 判 280 ページ 定価 3000 円＋税

【紹介】

民話やおとぎ話の動物と人間の関係、寓話やファンタジーに登場する精霊、狩猟と男性性、冒険物語を脱構築する動物——それらを文学や芸術はどのように描いてきたのか。大江健三郎、多和田葉子、松浦理英子たちの現代の「動物作品」は何を表象しているのか。

動物が人間よりも劣位に置かれる文化・構造を踏まえ、人間中心の視点を脱し、複数種（マルチスピーシーズ）の絡まり合いから作品や表象を読み解く。これに加えて、女性が男性から差別される非対称性に基づき、ジェンダーの視点も重ね合わせて多角的に分析する。

人間と動物を対立させる価値観を退け、エコクリティシズムやポストヒューマンの思想の潮流に棹さしながら、動物表象に潜む力学を浮き彫りにする。動物や人間、精霊をめぐる物語の森に分け入り、マルチスピーシーズやジェンダーなどの複合的な視野で作品の可能性を浮上させる新たなリーディングの地平。

【目次】

序文 マルチスピーシーズ物語の森のマッピング 村井まや子／熊谷謙介

第1部 記された〈動物〉と〈性〉

第1章 共苦による連帯とその失敗——大江健三郎「泳ぐ男」における性差と動物表象の関係を手がかりに 菊間晴子

第2章 多和田葉子の動物演劇の試み——『夜ヒカル鶴の仮面』から『動物たちのバベル』へ 小松原由理

第3章 皮膚感覚的快樂の果てをめざして——松浦理英子『犬身』論 熊谷謙介

第4章 マルチスピーシーズおとぎ話研究序説 村井まや子

第2部 多様な種の文化表象へ

第5章 銃を持つダイアナ——世紀転換期アメリカにおける狩猟とジェンダーをめぐる言説 信岡朝子

第6章 オーストラリア児童文学におけるアボリジナル文化——精霊の表象を手がかりに 鈴木宏枝

第7章 モクモク村のQちゃん——「野生」と「男性性」のクィア・リーディング 菅沼勝彦

第8章 ワクチンとしての物語——章夢奇のドキュメンタリー作品における女性の語りを手がかりに 秋山珠子

<https://www.seikyusha.co.jp/bd/isbn/9784787292759/>

2023年度第1回研究会は、叢書出版後、2024年3月に書評会として開催予定である。

(文責 熊谷謙介)

自然観の東西比較

今年度は、諸般の事情により活動は休止状態であった。

(文責 上原雅文)

日中韓対照言語研究

年2回以上、研究会を開催し、研究の活性化を図っている。メンバーによる発表に加え、海外の研究者にも参加を呼びかけている。対照言語研究の観点から日中韓以外の言語の研究者にも発表を呼びかけている。

今年度は下記の日程で研究会の開催を予定している。

研究会の開催

(1) 日 時：2024年2月20日(火) 15:00~17:00(予定)

場 所：Zoom

発表者：高木南欧子(本学国際日本学部国際文化交流学科教員)

テーマ：OPI データから見た漢語の使用

——中級、上級、超級の韓国語母語話者の発話から——

(2) 日 時：2024年3月14日(木) 15:00~17:00(予定)

場 所：Zoom

発表者：尹聖楽(本学国際日本学部国際文化交流学科非常勤講師)

テーマ：日本語の「なら」と韓国語の「-다면 tamyen」の対照分析

(文責 尹亭仁)

各国近代文学の研究

共同研究グループ名：各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催

叢書『翻訳としての文学』刊行に向けた研究会（報告会）

開催日：2023年8月14日

会場：ZOOM 開催

講演者：古屋耕平，岡部杏子，吉田遼人，中村みどり，山本亮介，松本和也

演題：『翻訳としての文学』寄稿論文についての現状報告

2. 活動内容

本研究グループは、活動8年目となる。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも、研究をめぐる方法や環境・場の異なりについて相互に意識し、意見交換をしながら、領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。

今年度は、これまでの中仕切りとして、叢書の刊行を企画した。「翻訳としての文学」という、総合テーマに向けて、それぞれの研究領域からの議論を集積した研究書を織りあげたため、7月に改めて執筆予定者の要旨をまとめ、8月には、準備状況の報告会を行った。以後、論文の執筆、校正作業にあたり、年度末に研究成果を公刊した。

（文責 松本和也）

知覚認知システムの普遍性と多様性

1. 講演会・研究会の開催：なし

2. シンポジウム開催：なし

3. 活動内容：

本研究グループは、人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

（文責 吉澤達也）

学びの見える化

『学びの見える化の理論と実際』を読み解く会（公開研究会）の実施

『学びの見える化の理論と実際』（勁草書房、2023）が発刊された。本書は、「職場や学校で獲得すべき能力を明瞭化する」という趣旨に基づき、各分野における教育イノベーションに向けた一石を投じるものである。しかし、学びによって「人」や「組織」が本当に変わりつつあるのか、当初の願いやねらいが実現しているかなど、教育現場では「学びの見える化」が十分ではない。そこで、神奈川大学人文学研究所を起点に、下記の研究会を実施した。本書で描かれた各分野の「学びの現場」の理解を深めるための「叢書の読み解き会」を行った。

○なぜ学びを見える化するのか？ 見える化の方法論

日時：5月13日（土）9時～11時

講師：森和夫（一般財団法人職業教育開発協会代表理事）、西村美東士（聖徳大学児童学部元教授・現非常勤講師）、齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部教授）

コーディネーター：齊藤ゆか

○行政・非営利組織における学びの見える化実践

日時：6月10日（土）9時～11時

講師：長浜洋二（モジヨコンサルティング代表）、山本直輝（公益財団法人ハーモニイセンター理事）、齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部教授）

コーディネーター：西村美東士

○企業・開発教育における学びの見える化実践

日時：7月8日（土）9時半～12時

講師：岩堀嘉仁（トヨタ自動車株式会社・車両技術開発部組長）、森和夫（一般財団法人職業教育開発協会代表理事）

コーディネーター：森和夫

○学校における学びの見える化実践

日時：9月9日（土）9時半～11時半

講師：小桐間徳（神奈川大学理事長付特別審議役）、鈴木英夫（神奈川大学法学部教授）、太田早織（神奈川大学人間科学部助教）

コーディネーター：西村美東士

○開発・病院等における学びの見える化実践

日時：10月14日（土）16時～18時 ☆（時間帯変更）

講師：安藤めぐみ（株式会社コーエイ・リサーチアンドコンサルティング）、大瀬恵子（一宮研伸大学看護学部講師）、久米篤憲（株式会社 PASC 代表）

コーディネーター：森和夫

○学びの見える化の課題と展望

日時：11月18日（土）9時半～11時半

講師：森和夫、西村美東士、齊藤ゆか

コーディネーター：齊藤ゆか

（文責 齊藤ゆか）

芸術（アート）と物語の交雑／発信力

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会

開催日：2024年1月10日

会場：ZOOM 開催

講演者：仲田恭子氏（アートひかり）

演題：演劇をつくりつづける ―― 演出・身体・地域

活動内容

本研究グループは、2020年秋に結成したもので、今年度は4年目となる。今年度中の活動としては、問題関心のすりあわせを進めつつ、それぞれに研究活動を展開した。

松本は、現代演劇を演出という観点から考えるために、上記1の講演会を催し、演出という作業の具体相について、理解を深めた。水川は、伏木啓によるパフォーマンス作品を、みなとみらいキャンパス「ナレッジコア」にて上演する企画を立ち上げ、それに関わり名古屋学芸大学において特別講義（2023年9月21日（木））を行った。藤澤は、アートと物語の関係、特に浮世絵における物語（歌舞伎などの

演劇も含む)の表現について焦点をあて、作品の調査を行った。研究成果として「はじめての「写楽」入門」(『歴史人 2023 年 12 月号増刊 特集「葛屋重三郎とは、何者なのか」ABC アーク, 2023)を發表し、歌舞伎役者の個性をどのように表現したのか、写楽の具体的な描写の特徴を明らかにした。

(文責 松本和也)

おとぎ話文化研究

今年度はメンバー各自がおとぎ話文化に関する研究調査と研究成果の公表を行い、互いの研究内容についての意見交換を継続的に行った。主な成果は以下のとおりである。

1. 本共同研究グループのメンバーの大塚奈奈絵氏が、ちりめん本「日本昔噺シリーズ」の再話者の一人であるジェイムス夫人が果たした役割について分析した論考2本が、今年度発行の『人文学研究所報』vol. 69とvol. 70にそれぞれ掲載された。
2. オーストラリアのファンタジー作家 Isobelle Carmody 氏を招いて、創作とおとぎ話の関係についての講演会を下記のとおり開催した。

演題：Leaving the Path and Other Dangers

日時：2023 年 11 月 22 日 (水) 12:30~14:00

場所：神奈川大学みなとみらいキャンパス 18F プレゼンテーションフィールド

司会：村井まや子

主催：神奈川大学人文学会、おとぎ話文化研究所 (所長：村井)

3. 本共同研究グループのメンバー2名(鈴木宏枝氏と菅沼勝彦氏)と代表の村井が、おとぎ話や児童文学の中で動物とジェンダーが交差する様相を分析した単著の論考が、2024 年 2 月に刊行予定の神奈川大学人文学研究叢書(編集は共同研究グループ「〈身体〉とジェンダー」)に収録される。
4. おとぎ話にみる複数種の間関係を再考する村井の研究課題「Multispecies Fairy-Tale Library Project」の一環で、ロンドン芸術大学コミュニケーションカレッジの研究者と連携して、図書とデザインの展示を2024 年 3 月に本学みなとみらいキャンパス 1F で開催する。

本共同研究グループは、代表の村井の退職に伴い、2023 年度末をもって活動を終える。これまで研究活動を支えてくださった人文学研究所のスタッフと常任委員のみなさまに、心より感謝申し上げます。

(文責 村井まや子)

神奈川の地域と文化

本研究は、横浜をはじめとする神奈川県のあるさまざまな地域の文化・歴史・民俗・地理・観光の諸相について、本学に集う様々な領域(観光学、考古学、地理学、民俗学、歴史学など)の研究者たちが集い、それぞれの強みを活かしつつ他の領域の手法からも刺激を受けながら、学際的に探究していくことを目指している。最終的には、本研究の成果を『大学の神奈川ガイド』と題した叢書として出版したうえで、講義・ゼミをはじめとする本学における様々な教育機会に活かし、人文学に根差した神奈川へのまなざしを神大生のアイデンティティーのなかに根付かせることを目指すものである。

昨年度は3度の研究会をおこない、民俗学・地理学・歴史学・観光学といった学内の様々なディシプリンの研究者たちに、さらに学外から各トピックの第一人者の研究者も客員所員として加わることで、活発な議論が展開された。

この成果をふまえ、本年度は『大学の神奈川ガイド』の刊行を目指してメンバー各自の執筆の段階に入った。メンバー諸氏には8月までに原稿を提出してもらい、編者(共同研究会の代表者である平山

昇)が出版社とともに検討したうえで、9月に諸氏に修正稿の提出を依頼した。幸いにもほとんどのメンバーから順調に提出がなされ、11月には初校ゲラが出来るところまでこぎつけた。

今後、編者と出版社とやりとりをしながら全体の構成を整え、2024年度夏頃までの刊行を目指していく。

(文責 平山昇)

観光と美術

1. 研究会の開催

第3回研究会

開催日：2023年6月30日(金)

会場：ZOOM

参加者：島川崇，角山朋子，クインタナ・シェラー，増子美穂，岡本岳大

検討内容：フランスの人気ツアーガイドの中村潤爾氏とZOOMでつないで、フランスのガイド事情を学んだ。フランスにおいては、遺産の活用にガイドは不可欠であると考えられており、ガイドは学芸員と並ぶリスペクトをもって迎え入れられている。観光客が説明なしで直接的に見るだけでは分からない文化遺産の持つ価値を最大限に伝えるのがガイドの仕事であるから、ガイドに求められる能力もかなり高度である。ガイドは、文化遺産に対する知識だけにとどまらず、いかに楽しく伝えることができるかということも重視されているところが日本と大きく異なる点である。フランスでは大学の人文学系の学部にガイド資格の取得コースが設けられている。これが、観光ガイドが職業として確立する基礎となっているということが理解できた。

2. シンポジウムの開催(予定)

横浜美術館からみえる「観光」

開催日：2024年1月24日(水) 16:00~17:30

場所：1階米田吉盛記念ホール

講演者：襟川文恵氏

横浜美術館渉外担当リーダー

内容：横浜美術館が3年の休館を経て2024年3月15日からリニューアルオープンし、オープンと同時に3年に一度開催されるアートの国際展覧会「横浜トリエンナーレ」も開催される。ポストコロナの新しい横浜美術館は、アートを通して新しいものに出会う、お互いを受け入れることで誰もが自分らしくいられる、そのことによってみんなが生きる力を得ることができる、そのような美術館を目指していく中で、「観光」はどう見えているのか、みなとみらい地区の各企業とアートを通じて連携を深めている襟川文恵氏に講演をいただき、トークセッションも実施する。

3. 活動内容

ここまで3回の研究会および2回のシンポジウムを実施して、観光と美術の関連は、今までの経営学的視点や都市計画(建築学)的視点では見出すことができない新たな視点を見出すことができるということにあることに気づいた。中でも、今まで害悪とみなされていた地域のものが美術という視点によってそれが地域の宝となるという事例があるということが分かったので、来年度は、美術の視点によって地元の害悪が観光素材となった事例をさらに整理していきたいと考えている。

(文責 島川崇)

言語景観と多文化共生

本研究は、2020～2022年度の学内共同研究奨励助成金を獲得したため、2023年度は『多文化共生社会の情報発信を再考する（仮題）』という題目での図書刊行に向けた打ち合わせを開始した。

2023年5月29日・9月21日・10月8日・12月28日にオンラインでのミーティングを実施し、2024年度に予定する刊行図書の内容や章立てについて議論を重ねている。

（文責 鈴木慶夏）

国際日本研究

1. 講演会の開催

第1回講演

開催日：2023年5月24日（水）

会場：MMC 4020 と Zoom

発表者（所属）：マッコリー・トーマス（シェフィールド大学 人文学部）

演題：Composition under Constraint: Gender-Based Approaches to Topic in *Eikyū hyakushū*

第2回講演

開催日：2023年7月19日（水）

会場：MMC 4020 と Zoom

発表者（所属）：ウェーリー・ベン（カルガリー大学 人文学部）

演題：[Book talk] *Toward a Gameic World: New Rules of Engagement from Japanese Video Games*

第3回講演

開催日：2023年10月18日（水）

会場：MMC 5030

発表者（所属）：ロ・ワイ・イー（外国語学部 英語英文学科）

演題：[Book talk rehearsal] *Empire of Culture*

第4回講演

開催日：2023年11月22日（水）

会場：MMC 5030 と Zoom

発表者（所属）：グルーノ・トリストン（名古屋大学 人文学研究科）

演題：Tokyo Station and the Building of Japanese Imperial Urban Space

第5回講演

開催日：2023年12月20日（水）

会場：MMC 5030 と Zoom

発表者（所属）：ルパート・ブライアン（国際日本学部 国際文化交流学科）

演題：When “Turning the Dharma Wheel” (転法輪) Means “Subjugation” (調伏): The Curse Rite Tenpōrin hō (転法輪法) and the Construction of the Sovereign in the Kami-Buddha Multiverse of Medieval “Japan” (日本)

第6回講演

開催日：2021年1月17日（水）

会場：MMC 5030 と Zoom

発表者（所属）：シェラー・クインタナ（国際日本学部 国際文化交流学科）

演 題：The Big Lives of Little People: Imaginary Places and the Edo World View

2. シンポジウムの開催

なし

3. 活動内容

2023年度は国際日本研究グループの2年目であった。予定通り、本研究グループの研究者や外部の研究者による講演会を計6回開催した。ウェーリー氏とグルーノ氏の講演は一般に公開され、H-netや他の公開研究リストで告知されたために対面・オンラインによる外部の聴講者も参加した。毎回実り多い意見交換ができた。

(文責 ウェルカー・ジェームズ)